

無言の學士會

小島松之助

昔々、波斯國のアマダンといへる市に、名高き學士會あり、其定員は常に一百人にして、其會の規定、第一條には、

「會員は多く考へ。少なく、記述し。且、沈黙なるべし」とあり、人々、之を呼んで、無言學士會といつて、當時波斯に於ける學者にして、此會に入會せんと希望せぬものはなく此會の會員となるは、非常の名譽であつたそです。

或る時、ドクトル、ゼーブと申す當代第一流の學者が、此無言學士會に、一人の欠員を生じたを聞きつけ、入會を請はんと思ひ、遙るく、アマダンにまゐり、其會員の集まれる學院の門口

を叩き、名刺に「ドクトル、ゼーブ、が入會を請ふ」と書り、會長に通じてくれと門番に頼のみました、門番は直に名刺を會長に通せしめ、如何せん、時既に後れ、もはや、欠員は満員となり居りたれば、此無言學士會は、此聰明、識達なる學者ゼーブを拒絶せねばならなかつたのです。

そこで、此入會拒絶の旨はゼーブにどんなにして無言で答へるべきかにつきては流石の會長も稍當惑いたしました。暫く考へた後、會長は大なる杯に一ぱい、水を入れ、最早其上一滴でも入るれば洩るゝまでに満々と盛り、そふして、手眞似をなして、入會候補者を招き入れしめました。ゼーブはいとも質朴なる服装にて、無造作に入り來つた、そこで會長は起立し何んとも一言も發するとなく、いと氣の毒げなる目くばせして、水を

盛りたる杯さかを示しめしました。ドクトル、ゼーブは直すに學士會がくしかいは既すでに滿員まんげんとなり居いるを悟さとりましたが、尙なは失望しつぱいいたしませずして、たとへ、定員ていげんを越こへて已おのれ一人入會いちにんにけいかいを許ゆるした所で、少しも差支さつかはなからうといふことを説ときつけやうと思おもつて、偶々たま、足あしもとに、薔薇ばらの一葉ひとはの落おちたのを見みつけたもんですからすぐ之これを拾ひろふて、杯水はいすい一滴てきもこぼさない様に、静しづかに杯水はいすいの上うへに浮うかばしめました。此敏達このびんたつなる返答へんたうにより、一同いちどう、皆みな、知らずく拍手歡迎はつしゅかんげいいたしまして、百人ひゃくにんの定員ていげんを犯かして、ドクトル、ゼーブを入會にけいかいせしむるを一致いちじいたし直すに會員名簿かいみんめいぼを出だした、此名簿このめいぼには新入會者しんにゅうけいしやは自ら署名しごめいする定めでありましたから、ゼーブも直すに筆ふでをとつて自署じしよいたしましたが、尙な、例れいにより無言むげんにて入會感謝にけいかいかんしゃの意いを表あらはさねばならなかつたので

す。

實じつにゼーブ氏は此無言學士會員このむげんがくしかいげんに對たいして、無言むげんにて感謝かんしゃをいたしたのです。即すなはち、白紙はくしに(100)と書かき(之これは在來ざいらいの同胞會員どうぱうかいげん、一人にんの意いを寓ぐしたのです)次に其左そのひだりに0を書かき加くはへ100)とし次の如ごとく書かきました。

(0100)

「其價值そのちやうちは更に増減ぞうげんすることなからん」

會長かいちやうはいと丁重ていじゆうに泰然たいぜんとしたる体ていにて筆ふでをとり直すに。

(1000)

「其價值そのちやうちは此これより十倍じゅうばいとなるならん」

と書かきて答こたへましたといふことです。